

「蜻蛉日記」執筆動機試論

二十七回生 藤吉 栄

目次

序

第一章 諸説とその疑義

第一節 一括回想説

第二節 部分的成立説

第二章 上・中巻にみる道綱母

第一節 上巻にみる道綱母

第二節 中巻にみる道綱母

第三章 執筆の動機

第一節 「序文」をめぐって

第二節 執筆動機

結び

序

「蜻蛉日記」は道綱母という一人の平安時代の婦人によって書かれた。しかも、その内容は、藤原兼家という一流貴頭である夫との決して幸福とは言えない結婚生活を書き

綴ったものである。この現代においても、かなりセンセーショナルと思われる告白録を上流婦人である作者が書いたのは何故なのか。私の素朴な疑問である。

「蜻蛉日記」は「源氏物語」に先立ち、「土佐日記」の後をうけて書かれた我国における最初の女流日記文学である。

従来、その成立には様々なアプローチが試みられているのであるが、私はそれらの説を参考にしながら、道綱母に筆を執らせたものゝ執筆動機、執筆意図の面から成立論に発展させたいと思う。

なおテキストには、川口久雄校注、日本古典文学大系「かげろふ日記」を用いた。

第一章 諸説とその疑義

「蜻蛉日記」には従来、その成立について諸説があり、大別すると、一括回想説（池田亀鑑、岡一男、柿本奨氏等）

と部分的成立説（藤岡作太郎、上村悦子、喜多義勇、守屋省吾、川嶋明子、古賀典子氏等）の二説に分かれる。各々の成立説を検討した結果、上巻における「跋文」が問題になってきた。すなわち、「跋文」を文字通りにうけとれば、作者はそこで日記をしめくくったことになるからである。そうであれば、道綱母が描こうとしたものは、上巻の世界のみであったということになる。道綱母が最初に筆を執ったとき、描こうとしたのは何であったのか。執筆動機を探るにあたって、まず、それを限定しなければならぬであろう。

第二章 上中巻にみる道綱母

第一節 上巻にみる道綱母

上巻の記事は、七十五段に分けられているが、（川口久雄氏・日本古典文学大系本）そのうち、「町小路の女」に関する一連の記事（七十五段中十三段）をのぞけば、明るい記事、すなわち、兼家の愛情を感じさせる記事となっている。それでは作者の描こうとする「かげろふ」の身の不幸は「町小路の女」にあったのであろうか。「町小路の女」の事件は作者が「今ぞ胸はあきたる」と記すように、天徳二年に終結しており、執筆時点においては、すでに過去のものとなっていたはずである。道綱母にとって、「町小路の女」の事件は確かに衝撃であったに相違ない。しかしながら「八三夜しきりて」通えば結婚が成立する漁色の対象に

すぎない「町小路の女」に対して、正式に兼家を招婿した道綱母の優位性は明らかであったと思われる。ましてや「本朝第一美人也」（「尊卑分脈」）「きはめたる和歌の上手」（「大鏡」）である道綱母にしてみればなおさらのことであったと想像できるのである。「町小路の女」は、結局、作者にとって、どうしても許せない存在であった。「あんな女、とさげすんでいるような女に見返られた時、嘆き怒る」（柿本奨・角川文庫「蜻蛉日記」解説）のである。だからこそ、道綱母は執筆時点において、すでに兼家と「町小路の女」との仲は終結していたにもかかわらず、その始まりから終るまでを書いたのであろう。この「書いた」という行為そのものの中に、作者の自負と矜持をみる思いがする。それゆえ、そこに描かれるのは、威丈高な道綱母に対して、常に下手にでて、作者に気を使う兼家である。そこに「かげろふ」の身の不幸を見出すことはむずかしい。

ところで、上巻において兼家の愛人、妻妾として、その存在がはっきりと記されているのは「町小路の女」とも一人、「時姫」がある。兼家には作者と結婚する以前において、「時姫」という正妻格の妻妾があった。道綱母と同様、藤原中正を父にもつ中流貴族の子女である。「町小路の女」の事件さなか、作者は次のように記す。

。年。ご。ろ。の。と。ころ。も。た。え。に。な。り。傍。点。筆。者。以。下。同。じ。
。子。ど。も。あ。ま。た。あ。り。と。き。く。所。に。も。む。げ。に。た。え。ぬ。と。き。く
このことは、とりもなおさず作者が「町小路の女」など

問題にしておらず、実は「時姫」をみすえていたことを示すものではなからうか。「町小路の女」に対するような憤りは「時姫」に対してはみられない。しかし、作者がかなり「時姫」を意識していることはおのずと知られるのである。△いまぞれいのところに、うちはらひてなど、きく。

されどここには例のほどに通ふ△たのもしげにみゆれどわが家とおほしきところは異になむありければ、いとおもはずにのみぞ、よはありける▽△かのところにもいでたりけり、さなめりとみて、むかいにたちぬ▽以上、幸せな記事のなかにみえる「時姫」意識である。このように、幸せなときであっても、「町小路の女」事件という暗さのなかにあっても、作者は「時姫」との距離に一喜一憂するのである。その最も顕著な例が、安和元年九月の初瀬詣での顛末である。その年十月の「時姫」腹超子の女御代出という「時姫」側の明らかな優勢にいたたまれなくなった道綱母は初瀬詣でを強行する。△しのびやかにと思ひて、人あまたもなうて、いでたちたるも、わがころのをこたりにはあれど、われならぬ人なりせばいかの、しりてとおほゆ▽にその心境が窺われよう。このデモストレーションに対して、兼家は超子の入内準備に多忙の中を宇治まで迎えにくるのである。この行為に作者は兼家の愛を再確認し、帰宅後は入内準備に協力する。

以上のように、上巻における作者の苦悩は「時姫」という存在にあると言えるのである。苦悩の対象が「町小路の女」などという卑しい女ではなく、正妻格の妻妾である

「時姫」にあることから、作者の自負と矜持のほどが知られるであろう。自分は正妻格の妻妾と比べられてもおかしくない存在だと言っているのである。作者は「時姫」こそが最大のライバルだと思っていたのである。そして、その自負と矜持とが作者の苦悩を生みだしているのであった。上巻における明るい記事も、「時姫」に劣らない兼家の愛情を物語るものとして、この自負と矜持が書かせたものであろう。

第二節 中巻にみる道綱母

中巻においては、形式上は上巻をうけていると思われるが、その内容を検討してみると、上巻とはうってかわり、明るい記事は中巻冒頭と道綱に関する記事を除けばほとんどみられず全般に暗い記事で覆われている。全巻における△涙▽は三十七例（上巻九例、中巻二十三例、下巻五例）、△悲し▽は五十一例（上巻十九例、中巻二十九例、下巻三例）みられ、ともに中巻が最も多い。さらに注目すべきことは△涙▽△かなし▽の上巻と中巻とにおける性質の変化である。上巻における△涙▽△かなし▽は父の離京、母との死別、姉の離京、兼家の病氣、藤原佐理の妻が出家したことへの同情という、いわば人間として当然のものである。それに対して、中巻においては自分自身の身の上を思つて△涙▽にむせぶのであり、△悲し▽と感じるのである。そして、それは「近江」の出現によつてもたらされたものなのであった。「近江」の存在を知ったとき、作者はもう三十五歳であり、女としての盛りはすぎていた。一方、「近

江」は小野宮実頼（主兼家の伯父、時の摂政大政大臣）の思ひ人であり、かなりの美貌の持ち主であったと思われる。また大式藤原中正の娘であるとも言われており、いずれにしても「町小路の女」のような卑しい女ではなかった。道綱母には「近江」を上回る若さも美貌もすでに望めないものになつていたのである。兼家の途絶えも深刻なものであった。上巻における高飛車を作者、下手にでる兼家という構図は崩れさり、両者の立場は逆転しているのである。天祿二年六月からの四十日に及ぶ鳴滝参籠は、この苦しみから逃れる唯一の方法であつた。

以上のように、中巻にみられる道綱母の姿は上巻とは異なり、嘆きの身である。上巻に満ち満ちていた自負も矜持もかけらすら感じられない。それは、描く道綱母が上巻とは異つた心理状況のもとに異つた執筆意図をもつていたからなのである。おそらく作者は中巻の世界など予想だにせず、日記（上巻）の筆を執つたのであろう。上、中巻における心境の変化はそれを裏付けるものであり、上巻が中巻とは切り離されて個別になつたものだと言えるのである。

第三章 執筆の動機

第一節 「序文」をめぐって

「蜻蛉日記」は次の文章で幕をあける。いわゆる「序文」である。

かくありしときすぎて、世中にいとものはかなく、とに

もかくにもつかで、よにふる人ありけり

かたちとても人にも似ず、ころたましひもあるにもあらで、かうもの、要にあらであるも、ことはりとおもひつゝ、ただふしおきあかしくらすまゝに、世中におほかるふるものがたりのはしなどをみれば、世におほかるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上までかき日記してめづらしきさまにもありなん、天下の人のしなたかきやと問はんためしにもせよかしとおほゆるも、すぎにしとし、つきごろのことも、おほつかなかりければ、さてもありぬべきことなん、おほかりける

ここには、この作品を書くにあつた作者の宣言が記されておられ、自己紹介、執筆動機意図、そして読者への弁明が述べられている。この「序文」と執筆動機とは柿本奨氏を除けば直接に結びつけられていないのであるが、私にはこの「序文」の中にそれが見出されるように思われるのである。

一、「ものはかなき」身の上

「序文」のなかに「ものはかなし」という語がある。この解釈は「頼りなく」（「かげろふの日記」新釈 大西・次田両氏）や、「『もの』は接頭語、『はかなく』は、はきはきせず、たよりなく」（喜多義男「全講蜻蛉日記」）に代表されるように、「はかなし」と同義に解釈されていた。しかし「ものはかなし」は上巻「序文」と「跋文」に用いられている語でもあつて、作者がことさらに「ものはかなし」と記すのは、それだけの意味がこめられている

ととるべきではなからうか。そこで「蜻蛉日記」における「はかなし」と「ものはかなし」の検討を行ってみることにする。まず、「はかなし」は全巻に十九例（上巻十例、中巻四例、下巻五例）みられる。ところで、上巻における

「はかなし」の使われ方は、中、下巻における「はかなし」とは異っているのである。すなわち、上巻の「はかなし」は△その年はかなくすぎぬ▽など季節の推移を示すもの、△はかなき祓▽など「ちょっとした」の意に用いられていられるものが十例中八例をしめる。あとの二例については、一例は△忌日などはてゝあはれにはかなくとも▽という「母の死の悲しみを表現したもの」（柿本奨「蜻蛉日記全注釈」）であり、△はかなき仲なれば▽という一例のみが兼家との関係における身の上の規定である。それに対して、中、下巻の「はかなし」は九例中八例が身の上の規定である。一方、「ものはかなし」は上巻のみみられる語であり、「序文」「跋文」を含めて、五例の「ものはかなし」はすべてが身の上の規定に用いられているのである。したがって、「蜻蛉日記」上巻における作者の身の上の規定は「ものはかなし」という語にあるのではないかと考えられるのである。

ところで、「ものはかなし」という語は「蜻蛉日記」上巻にしかみられず、また同じ平安朝の女流日記である「和泉式部日記」には一例にみられるが、「更級日記」にはみられないことからすれば、極めて限られた場合に使われている語であると言えよう。伊藤博氏は「『序』『跋』で

『ものはかなし』と述べながら、その実体は多く提示されていない」（「蜻蛉日記研究序説」）と言われている。そこで、「ものはかなし」の用例を検討し、その実体を探ってみたいと思うのである。

(イ) 康保元年・夏

さいはひある人のためには年月みし人も、あまたの子などもたらぬを、かくものはかなく、おもふことのみしげし

(ロ) 康保元年・秋

かくものはかなくでありふるを、夜晝なげきにかば

(ハ) 康保三年九月

九月になりて、「世の中をかしからむ、物へ詣でせばや、かうものはかなき身の上も申さむ」などさだめて、いとしのび、あるところにものしたり

(ニ) (イ)、(ロ)はともに明るい記事のなかにあらわれている。

「町小路の女」も△めざましと思ひしところは、いまは天下のわざをしさわぐとて心やす▽き存在となり、また兼家は△よつのしなになりぬれば、いとねじけたるもの、大輔などいはれ▽る不遇の身となり、△世の中をいとうとましげにて、ここかしこかよふよりほかのありきなどもな▽く、道綱母は△いとどかにて▽すす日々であった。そのなかにおいて、作者が△ものはかなし▽と感ずるはなぜなのか。それは、前章で述べたように、道綱母は「時姫」を最大のライバルだと思っていたのであり、幸福な日々においても、道綱母がそれに浸りきれないのは「時姫」の存在

のためなのであった。「本朝第一美人三人内也」という美貌と「きはめたる和歌の上手」という才能をもってしても、道綱母が「時姫」に及ばないものがあつた。△あまたの子▽である。当時の政治形態は撰閥政治であり、それを裏面から支えていたのは閥閥政治であつた。すなわち娘を天皇の後宮に入内させて生まれた皇子を帝位につけ、自分は外祖父として権力を手中にするのである。いづれにしても「妻」の座を確実にするためには、子供は貴重な宝であつた。作者には結婚翌年の天曆九年に道綱が生まれたあと、続く子が生まれなかつたのに対し、「時姫」の方は、作者が兼家と結婚する以前に、天曆七年に道隆があり、また安和元年に冷泉帝女御になる超子も生まれていたかもしれない。その上に、応和元年には兼家の四男として道兼、二年には詮子、康保三年には五男として道長が生まれるのである。それゆゑ兼家にとって△わが家とおぼしき所▽が「時姫」をさすことは明らかであり、「時姫」が△さいはひある人▽である理由の一端は△あまたの子▽をもっていることにあると思われる。若さも美貌も歌才も、そして兼家の愛情さへもがあるというのに、道綱母が△ものはかなし▽と感じるのは、それは△あまたの子▽がないゆゑであつたと思われる。(1)も同様に不遇の身とはいへ、足繁く通ってくる兼家とのどかな日々を送っているわが娘に作者の母が△ものはかなし▽さを感じているとすれば、それはやはり△あまたの子▽なき故に生ずるものではなからうか。(2)についても、明るい記事が続くなかでも、ことに康保三年は、三月には

兼家邸へ病いを見舞い、四月は葵祭で兼家と共に「時姫」を嘲笑し、五月には作者に節会をみせてくれる。それでも道綱母は△世中の人のやうなら▽ず、△世に心ゆるびな▽いと嘆き、満足しておらず物詣でする。道綱母はこの物詣での目的が何であつたのか、明らかにしてはいないが、その目的は、下巻の天祿三年二月の養女を迎えようとする条になつて、はじめて△ただ今のごとくにては、ゆくゑさへ心ほそきに、たゞひとりおとこにてあれば、としごろもこゝかしこにまうでなどするところには、このことを申しつければ▽という形で明らかにされている。すなわち、物詣でをしては子供に恵まれることを願つたといふのである。△かうものはかなき身▽とは△あまたの子▽がないことを言うのであろう。

以上のように、上巻中の△ものはかなし▽に共通する具体的な内容は△あまたの子▽に恵まれない不幸を指すのである。そして、それらが明るい記事の中に見出されることに注目すべきである。すなわち、一応の幸せのなかに、道綱母の求めるより一層の幸せは「正妻の座」にほかならなかつたのである。ところが最大のライバルである「時姫」は兼家の正妻として△あまたの子▽をもつという絶対有利な条件を備えていた。作者にそれがなほ限り、「時姫」は絶対的な勝者であつた。つまり、上巻における「ものはかなし」の意味するものは△あまたの子▽がないために、正妻になれない状態ではないのか。作者の幸せのなかでの懊悩はすべて△あまたの子▽を有する「時姫」に対しての

ことであつた。己が身を「ものはかなし」と規定するのは「時姫」に対してのことなのである。

こうして「序文」の「ものはかなし」が△とにもかくにもつかで▽と並列である理由は明らかであろう。生活のすべてが夫婦関係にある道綱母にとって△とにもかくにもつか▽ないのは兼家の「妻」としてのことであり、「妻」であるような、ないような つまり正妻でないと言うのである。道綱母の自負と矜持とは兼家の一妻妾であることに甘んじることを許さないのであつた。

二、ふるものがたり

さて、「ものはかなし」い身の上である作者はなぜ執筆を思い立ったのであろうか。そこにこめられた道綱母のおもい―世中におほかたふるものがたりのはしなどをみれば、世におほかるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上までかき日記して、めづらしきさまにもありなん、天下の人のしなたかきやと問はんためしにもせよかし―を知るためには、平安時代の中流貴族の子女の精神構造から探つてゆかなければならない。当時の貴族の娘の日常は「習字、和歌、絃楽器の習得を中心に、漢詩文、裁縫、染物などの稽古に勤み、余暇は物語の耽読にあてた」(菊田茂男「家の女」)のである。これは「更級日記」作者や、「源氏物語」の玉鬘の例によつても知られている。その頃もてはやされた物語としては、源為憲の「三宝絵詞」の序にみられるように、「魚虫など名づけたる物いはぬ者にものを言わせ、情なき者に情をつけた」物語のような伝奇性、架空性の強

いものもあつたが、一方、岡一男博士の言われる「交野少将物語」は「落窪物語」に「都のうちに女というかぎりは交野少将めでたまはぬはなき」という美男の貴公子を主人公とする物語であり、そのような、「写実度の高い卑近な貴族生活に取材した」(中野圭一「蜻蛉日記における物語的世界」)物語も存在したのである。作者が言う△ふるものがたり▽はことに後者であると思われ、その種の物語は作者にとつては物語的世界での空想事ではなく、貴顕との恋愛譚は近き将来に己が身の上にも実現可能なこととして受容されていたのである。それは、道綱母が官仕えの経験をもたない「家の女」(菊田茂男「家の女」)だからである。多くは耳によつて、極くたまに目によつて接しうる様な官廷と上流貴族を、それでも諦めきれないものとして執拗に夢想する「家の女」にとつて、上流貴紳の生活と古物語の主人公たちの世界は矛盾なく重り合うものとして、かたく信じられていたのである。道綱母にとつて△柏木の小高きわたり▽からの求婚は運命的な事件であり、兼家はまさに道綱母が憧憬していた人物であつた。天曆八年秋、道綱母は遂にその人の妻となるのである。こうしてはじまる結婚生活が幸福なものであつたら「蜻蛉日記」は執筆されるはずもないのであつた。ところが△ふるものがたり▽の夢想に胸ときめかせていた結婚生活は△ものはかなし△ものでしかなかったのである。なぜなら、道綱母が求めていたものが、「古物語の世界に体得した理想的結婚」であつたからである。そして、それはおそらく兼家の正妻になること

であったに相違ない。ところが道綱のみで続く子に恵まれない道綱母に対して「時姫」には八あまたの子✓がで、作者の期待は見事にはずれるのである。八ふるものがたり✓への夢想に生きる「家の女」の錯誤である。古物語的構図はあたかも実人生を写したもののように思われがちであるが、しかし今、自分が身をもって体験したかけがえのない実人生と比較してみると、やはりそれは、いかにも作り事であったと言うのである。そのことを認識したことが「序文」を書く契機になったのではないか。つまり、正妻への夢がはかなく消えたとき、八ものはかな✓い人生を八ふるものがたり✓の否定として書き綴ろうとしたのであろう。

第二節 執筆動機

さて、正妻への夢が破れ去ったときに上巻の筆がとられたのであるならば、その具体的な時期はいつであったのか。それは、安和二年におこった二つの事件、三月二十五日の「安和の変」、それに続く閏五月の東三条邸入りの絶望であり、それらに道綱母の執筆動機が見出されるのである。幼き頃から八ふるものがたり✓になれ親しみ、あこがれを抱いていた権門の世界との出会い、兼家の妻妾となることによつて道綱母にもたらされた。その時、道綱母の脳裏をよぎったものは夢が実現されることへの期待感と幸福感であった。一夫多妻という現実のなかであえぎながらも、道綱母は自分の夢⇨正妻になることを待ち望んでいたのであった。東三条邸入りがそれを意味するものであり、道綱母は十分に期待がもてると思っていたのだが、結果は悲惨

なものであった。期待が大きければ大きいほど裏切られたあとのショックは大きい。道綱母は八ものはかな✓い人生を悟らざるを得ないのである。ましてや、それより二カ月ほど前には「安和の変」による源高明失脚という「古物語的世界」の最後の夢が崩壊していたのである。八ものはかな✓い身の上と八ふるものがたり✓への対抗意識が結びつくのである。これらの二つの事件が動機となつて、道綱母は執筆を開始したのであると考えられるのである。

結び

こうして、安和二年閏五月からほどなく、道綱母は執筆を開始したのであり、「序文」でいうところの八ものはかな✓い身の上を綴っていくのであるが、正妻になれない状態を嘆く道綱母を襲ったのは「近江」の出現という正妻どころか、妻妾の地位もあやうくなつた状態であった。上巻末の「跋文」はこうした背景のもとに書かれたのであろう。つまり安和二年閏五月あたりから「ものはかなし」の世界を書き続けて、おそらく「御禊のいそぎ」までを書き終っていたと思われるのだが、天祿元年六月には兼家の途絶えが八夜みることは三十よ日、書みることは四十よ日✓とただならぬ状況になるのである。そこで道綱母は筆をとる余裕もなく、日記は中断されていたのではなからうか。そして約一カ月後、天祿元年七月「近江」の存在をはっきりと知った作者は「ものはかなし」の世界をこれ以上書き続けることが不可能になり、それはそれとしてまとめようとして「跋文」を置いたのであろう。こうして、上巻は個別に

成立したと言えるのではないか。

中巻はその後、おそらく天祿二年六月の鳴滝参籠の後、

上巻よりも、もっと不幸な自分を知ってもらおうと書き始めたものであろうと考えるものである。

西鶴「本朝二十不孝」について

二十七回生 吉田 祐子

目次

序

本論

第一章 西鶴の創作意識をめぐる

諸説の検討

第二章 西鶴の創作意識

第一節 序文及び二十話についての考察

第二節 『二十四孝』説話との関係

結び

には「貞享三曆丙寅霜月吉辰」とあり、今のところどちらとも断定されていないが、本書刊行当時は熱心な『孝経』の信仰者である將軍綱吉の統治下にあった。つまり、『本朝二十不孝』という題名は、当時流行した『二十四孝』『大倭二十四孝』に対して「四」の一字を「不」に置き換えるという着想によるものと言える。

しかし、西鶴の創作意識に関しては未だに定説が立てられていない。そこで、私は当時の時代背景、及び西鶴が読者として意識した町人の思想を明らかにし、さらに、作品の内容分析を進め、西鶴が如何なる意図の基に本書を執筆したのか、という点を探っていくことにする。

第一章 西鶴の創作意識をめぐる諸説の検討

西鶴の浮世草子『本朝二十不孝』は五巻五冊から成り、各巻四話、全二十話の短編小説集である。本書の成立は、序文の年記には「貞享二二稔孟陬日」とあり、一方、刊記

西鶴がどのような創作意識を持って本書を執筆したかと